

■今月の特選句

2019年8月



万緑が重くてならず帽子取る

棕本望生

これまで、万緑に重量を感じた俳人はいないね。感じたままを正直に書くと佳句になる。帽子を取るとして行動を具体的に書いたのもいい。



ぶら下がるパンに食いつき背丈伸ばす

山下正純

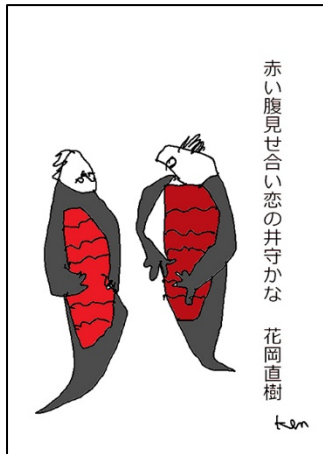
「運動会」の季語が隠されており、季語隠しの句である。原因と結果になっていて経過的ではあるが、発想の面白さには脱帽である。



青梅はあれからずつと酒浸り

八塚一青

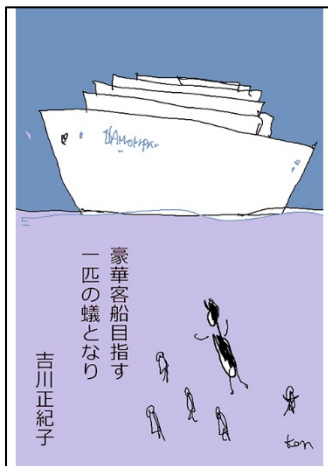
これは擬人化の句。梅酒を梅の立場から詠んだ。「酒浸り」というマイナスイメージの言葉を使い、裏切り構成にしたことで成功した。



赤い腹見せ合い恋の井守かな

花岡直樹

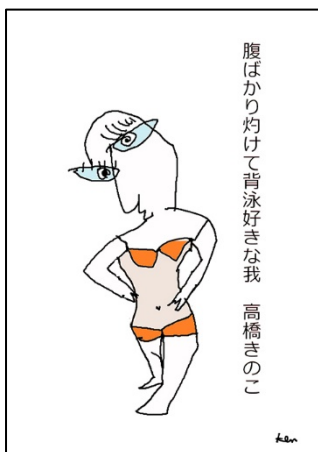
井守の腹が赤い理由がやっと分かりました。恋の井守と断定したところがよろしい。腹を見せ合っているとした物語性もよい。



豪華客船目指す一匹の蟻となり

吉川正紀子

寄港した豪華客船を一目見ようと出かけたら、想像以上の巨大な船体に驚いた。瞬間、自分が急に小さく縮んで蟻になったような気分に。



腹ばかり灼けて背泳好きな我

高橋きのこ

「我」として自虐ネタとするより「彼」として揶揄する方が面白いかもしれぬ。拙句に「背泳ぎの臍(へそ)を見られてしまひけり」がある。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

梅雨の雨二日目にして嫌はるる ・・・人間どもの勝手な判断	本門明男
噴水の法則解る待ちぼうけ ・・・解つたとともあの人は来ず	堀川明子
蚯蚓ごと畑売るはなし埒もなや ・・・蚯蚓のゐるは美田の証左	吉原瑞雲
のびてゆく黒い縫ひ目の蟻の列 ・・・縫ひ終へたとき縫ひ目なくなる	森岡香代子
十薬に浄化されたる狭庭かな ・・・ドクダミ植えて毒を消したか	田中 勇
近隣の蚩拉致して保存会 ・・・拉致に反対する会も出来	横山喜三郎
蠅に知恵蠅捕草にもつと知恵 ・・・気づいた人はもつと知恵者だ	藤森荘吉
冷酒に愚痴の一つを混ぜて飲む ・・・物足りなくて愚痴をまるごと	村山好昭
藪蚊にも見むきはされぬ石頭 ・・・頭の中身は柔らかいのに	相原共良
場違ひのやうな気のせし夏座敷 ・・・散らかつてゐる方が落ち着き	土屋虹魚
種明かしまだこれからと青胡桃 ・・・殻の中にはご馳走がある	工藤泰子
糸蜻蛉風の切れ端より生れし ・・・蜻蛉は風の色してみたり	日根野聖子
飯籠える二合三勺持て余し ・・・季語を見つけて有効利用	伊藤浩睦

■今月の滑稽句

* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

跪づきじつと見つめる蝶の羽化

たかが蚊の一匹に安眠を妨害

羽抜鶏ペットで満たす支配欲

古妻が八つ当たりする梅雨末期

天と地とダブルパンチの炎天下

首相の椅子社長の椅子の梅雨湿り

夏風邪に殺られつ放し馬の骨

ところてん犬に人格ありにけり

ががんぼや優男(やさ)の背(せな)にしがみつき

茅舎忌や帽子屋きちんと接客す

男根崇拜の社殿詣か夏の蝶

枇杷熟れる青いでべそを覗かせて

蛞蝓のお漏らしをして光るとは

蚊に食はれやさしく搔けばいいものを

父の日や脛かじり尽してもやしっ子

跳んだり蹴つたりの筋骨をかくし浴衣美女

虫かごにこぞって足出る蛙の子

ウォーキングはたと鳴き止む田の蛙

足元に藍の朝顔山手線

冷し中華始めましたと書く仲夏

出水川徒渡りして避難所へ

あめんぼう空を忘れて水の上

とりあへず西瓜の種の置きどころ

秋祭いずれ農継ぐ家もなし

来客に手抜きですがと冷汁を

暑中見舞の四文字硬き明朝体

破れ傘雨を漏らしてをりにけり

頭痛して気象病らし雷雨くる

夏負と多弁に語るお婆様

短夜の眠りの深きまだ眠し

女達よ蝶となるんだ高齢時代

夏暁カラスは希望の声で鳴き

梅雨の夜の雨漏りメトロノームめき

一汗のあとにこそある涼しさよ

ステップはシャルウィダンス羽抜鶏

歯を剥きだしの鬼百合の威嚇かな

梅雨空をつき刺してゐる蚕豆よ

宵闇の茅の輪をくぐる下駄の音

縁台や三ツ矢サイダーストローで

相原共良

相原共良

青木輝子

青木輝子

青木輝子

赤瀬川至安

赤瀬川至安

赤瀬川至安

荒井 類

荒井 類

荒井 類

井口夏子

井口夏子

井口夏子

池田亮二

池田亮二

石塚柚彩

石塚柚彩

石塚柚彩

伊藤浩睦

伊藤浩睦

稲沢進一

稲沢進一

稲沢進一

稲葉純子

稲葉純子

稲葉純子

井野ひろみ

井野ひろみ

井野ひろみ

上山美穂

上山美穂

上山美穂

梅岡菊子

梅岡菊子

梅岡菊子

梅野光子

梅野光子

梅野光子

フェアブルの眼真っ直ぐふんころがし
 折り紙の蕾開きて桔梗咲く
 クリムトの接吻の金風光る
 百年を伸ばしてみよと亀鳴けり
 夏富士やレースの前の験(げん)かつぎ
 闇の蚊と一対一の意地くらべ
 容姿にうっとり伊万里焼の風鈴の
 青石の句碑のとこしへ桐の花
 初西瓜種も飲み込み舌鼓
 更衣魔法の杖をひとふりの
 雀の子二三羽遊ぶ線路のうえ
 月光に照らされ艶艶柿若葉
 胃カメラを呑んで梅雨間の憂さ晴らし
 七月になっても欲しい物に金
 蚊一匹に翻弄される男かな
 花菖蒲勝負忘れて孤高なり
 初鯉すでに値引の札貼られ
 梅雨晴間世界の顔の揃ひ踏み
 蚊帳の夜幼き日々の声のして
 星のことは「はやぶさ」まかせ忘れ梅雨
 ほうたるや順番を待つもらひ風呂
 野の枇杷を接待なりといただきぬ
 慰霊の日にかき泡盛がぶ飲みす
 梅雨寒や夕方からの値引き待つ
 かぶと虫争ふ夜の腰ひかる
 百匹が一度に鳴くよ鈴虫は
 黒揚羽姥捨山に連れてって
 立つも良し浮かぶも宜し未草
 唐黍を聖火のやうに掲げ持つ
 油虫産むな増やすな地を這うな
 アナナスに仇なすなかれ水をやる
 夏蝶の屋根を超えゆく翼かな
 だぶだぶは兄のおさがり更衣
 蛇の腹ふくりふくれて食事中
 ぺつたりと尻を畳にあつぱつぱ
 水槽の金魚挨拶尾を振るわ
 芍薬の蕾つぎつぎ庭飾る
 シャキシヤキの音たて朝採りの胡瓜
 海の日に山の便りが来たりけり
 七夕竹あまた願ひに困り果て
 赤壁の熱きたたかひかき氷
 何時よりかかかあ天下や三尺寝
 父の日の父に女難の武勇伝
 神ほとけ食ひ物にして蟻地獄
 ラフマニノフその瞑想にラベンダー
 さくらんぼむすんでひらくやや児の手

太田史彩
 太田史彩
 太田史彩
 大林和代
 大林和代
 大林和代
 小笠原満喜恵
 小笠原満喜恵
 小笠原満喜恵
 岡田廣江
 岡田廣江
 岡田廣江
 小川鮎太
 小川鮎太
 小川鮎太
 奥脇弘久
 奥脇弘久
 奥脇弘久
 加藤澄子
 加藤澄子
 加藤澄子
 金城正則
 金城正則
 金城正則
 久我正明
 久我正明
 久我正明
 工藤泰子
 工藤泰子
 桑田愛子
 桑田愛子
 桑田愛子
 小林英昭
 小林英昭
 小林英昭
 近藤須美子
 近藤須美子
 近藤須美子
 下嶋四万歩
 下嶋四万歩
 下嶋四万歩
 白井道義
 白井道義
 白井道義
 水夢
 水夢

梅雨籠り駅前自転車預り店
 郭公のスタッカートのこだまかな
 神と仏と私の居場所畳の室
 田植機の腕はのの字を書き進む
 腰痛体操あじさいの吐息に合わせたい
 白扇や少し知恵出す半開き
 残業に泡と消えゆくビールかな
 風鈴は小銭の音よ寂しけれ
 生御霊ませば古希我若奥さん
 立葵一日五便のバスを待つ
 白シャツの裾は出そうか入れようか
 うちの猫網戸一気にかかけのぼる
 梅雨晴を遊具は少し揺れて待つ
 つばめの子飛ぶ練習を繰り返し
 高齢の月下美人に恋をする
 袈裟斬りにされてしまひぬ今年竹
 帰り道釣果とすべき秋刀魚買ふ
 ささやかな憂さ晴らしなるしゃぼん玉
 皇后陛下の装束の色柿若葉
 つる薔薇や古屋に磨きかけている
 麻の服皺を着こなすお洒落かな
 金亀子死んだふりする芸達者
 ミサイルにはイージスアショアより草矢
 サングラス妻と気付かず道ゆづり
 蛇苺橋梁工事の現場前
 苔茂る石段滑り帰ろうか
 黒南風の踊る街中傘降参
 西瓜買いスイカ落としてすっからかん
 扇子ほどセンスよいもの知らなんだ
 好まざる音楽は黒南風のごと
 脂ぎる貌で頬張る鰻かな
 蝉が鳴くあわてないでよ梅雨はまだ
 なめくじの喉のからから早梅雨
 雨模様なめくじの気分となつてゐる
 忙妻はプラスアルファさくらんぼ
 打(ぶ)つ掛けを搔つ込むけふの暑さかな
 丑の日や見た目蒲焼まあいいか
 幽霊の浴衣はらりと消えにけり
 月下美人君はあの頃若かった
 触れられて恥ずかしそうに含羞草

鈴鹿洋子
 鈴鹿洋子
 鈴木和枝
 鈴木和枝
 鈴木和枝
 高田敏男
 高田敏男
 高田敏男
 高田敏男
 高橋きのこ
 高橋きのこ
 龍田珠美
 龍田珠美
 龍田珠美
 田中 勇
 田中 勇
 田中早苗
 田中早苗
 田中早苗
 田中晴美
 田中晴美
 田中晴美
 田村米生
 田村米生
 田村米生
 月城花風
 月城花風
 土屋泰山
 土屋泰山
 土屋泰山
 土屋虹魚
 土屋虹魚
 坪田節子
 坪田節子
 坪田節子
 飛田正勝
 飛田正勝
 飛田正勝
 西をさむ
 西をさむ
 西をさむ

蛇進むすべ知らぬまま還暦に
 七夕と違い毎日ビール飲む
 専愛でること紫陽花愛でるとは
 退屈のカラスのあーあ梅雨の空
 桜葉の虫食ひ穴より夏陽かな
 ルナールの蛇のぼさんの俳句かな
 平手打ちして合歓の花起こしやる
 更衣鏡の五体ちと不満
 割り勘てふビール飲む人飲まぬ人
 青鷺に一瞥されて電話切る
 警官を誘惑したる小判草
 目高にも個性あるぞと胸を張り
 父らしき母らしき顔に夏燕
 柿古木青葉若葉の更衣
 梅雨入や雨粒弾む傘弾む
 黒揚羽夕陽をまとひワルツかな
 初蝶をスクロールして追ひかける
 草木の影法師にもとまる蝶
 雨しとど小首傾げる七変化
 思惑は梅雨空の如G二〇
 ずぶ濡れも我慢為所梅雨最中
 忍術か科学技術か水すまし
 天麩羅を揚げる母さん玉の汗
 溝浚五十六十は若いうち
 杣人の仕事は帰りの山女釣
 六月サミット探るつもりか脱走猿
 しどけなく皿に残され桃の種
 郭公に話の腰を折られけり
 ミステリー紙魚終章で走り逃ぐ
 土用波離脱で揺らぐ株為替
 吾が修羅を知るや臍の緒土用干
 非常ベル鬘忘れし熱帯夜
 豚足と親父ギャルらと焼酎と
 団扇持てばばはそのまま天国へ
 日雷うたれてみたい籠の鳥
 サングラスかけて娘よ母似なり
 願ぎ事を斜めに書いて星祭
 かかる日はみな炎帝に無抵抗
 守宮出づ我が世可もなく不可もなく
 妹に背丈越さるる額の花
 ほきと鳴る腰骨辺り夜の秋

花岡直樹
 花岡直樹
 林 桂子
 林 桂子
 林 桂子
 原田 暉
 原田 暉
 原田 暉
 久松久子
 久松久子
 久松久子
 日根野聖子
 日根野聖子
 廣田弘子
 廣田弘子
 廣田弘子
 藤森荘吉
 藤森荘吉
 細川岩男
 細川岩男
 細川岩男
 堀川明子
 堀川明子
 本門明男
 本門明男
 南とんぼ
 南とんぼ
 南とんぼ
 峰崎成規
 峰崎成規
 峰崎成規
 椋本望生
 椋本望生
 村松道夫
 村松道夫
 村松道夫
 村山好昭
 村山好昭
 百千草
 百千草
 百千草

行く先は糠床の中夏野菜
 ひまわりはくびをかしげる癖がある
 麦藁の香り確かめ夏帽子
 いくつかは数へて食べるさくらんぼ
 合歓の葉をお昼寝させるのが特技
 蝉生まるセミファイナルと呼びにけり
 水鉄砲だまし撃ちする無鉄砲
 梅雨ぐもり飛行機直下とびの飛び
 短夜のためにプリンを買ってある
 炎天に寝そべる雲は白いまま
 骨董を後ろ盾にし油虫
 ひとり碁の涼しく裏の裏を読む
 ゴキブリの畳の上で死ぬ望み
 梅雨の入うっかり転倒骨にひび
 病状を見舞うがごとく七変化
 大輪の百合の堂々咲きほこる
 梅雨時の湯水のちの恐ろしき
 お遍路や緑まぶしき一草庵
 蟻螂に屈めば蟻螂の目くばせ
 旧式の厠の隣の夏座敷
 百均でなくても百円布袋草
 早乙女にぴったり腰が村中に
 艶聞も咲かせて老いの花筵
 青梅は落ちてここよと香を放つ
 お化粧の途中までなり半夏生
 うたた寝の夢に登場サクランボ
 花菖蒲夜の銀座の艶をして
 蛙の合唱リーダーの居るらしく
 溺愛の果ての身命鉦叩
 揺るぎなき世となれ令和ラムネ抜く
 二人して財布を忘れ夜店かな
 幼子に悲鳴あげさせ揚羽蝶
 でで虫の居座るごとく片頭痛
 忍び足の目高泥棒転倒す
 いそいそと目高の親となりし夫

森岡香代子
 森岡香代子
 八木 健
 八木 健
 八木 健
 八洲忙閑
 八洲忙閑
 八洲忙閑
 八塚一青
 八塚一青
 柳 紅生
 柳 紅生
 柳 紅生
 柳澤京子
 柳澤京子
 柳澤京子
 山下正純
 山下正純
 山本 賜
 山本 賜
 山本 賜
 横山喜三郎
 横山喜三郎
 横山洋子
 横山洋子
 横山洋子
 吉川正紀子
 吉川正紀子
 吉原瑞雲
 吉原瑞雲
 渡部美香
 渡部美香
 渡部美香
 和田のり子
 和田のり子